



**Data** 2023-51

監督・脚本: ミカエル・アース  
 出演: シャルロット・ゲンズブール  
 /キト・レイヨン=リュシテ  
 ル/ノエ・アビタ/メーガ  
 ン・ノータム/エマニュエ  
 ル・ベアール/ティボー・ヴ  
 アンソン/ロラン・ポワトル  
 ノー/ディディエ・サンドル  
 /リリット・グラミュグ/カ  
 リスト・プロワザン=ドゥタ  
 ズ/エリック・フェルドマン  
 /オフェリア・コルブ

## 👁️👁️ みどころ

パリはきっと最も多く映画のタイトルに使われている街だが、この邦題は科学的におかしいのでは？もっとも、大学時代の私が毎夜聞いていたラジオの深夜番組「ABCヤングリクエスト」を考えると、この邦題もOK・・・？

十代の子供2人を残して夫が若い女と駆け落ち！そんな事態でもシャルロット・ゲンズブール演ずるパリの40オンナは強い。それを支えたのは“家族の絆”だが、それはどうやって培われたの？

深夜ラジオの仕事に図書館の仕事、更には2人の男との恋(？)、やりたいことに精を出すヒロインの前向きさと、孤独な少女との出会いが家族の絆を強くする姿に注目！

バブルに沸いた1980年代の大阪で生きた自分と対比しながら、社会党出身大統領の誕生に沸いた1981年から始まる、7年間に渡るヒロインのパリでの生きざまをしっかりと確認したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□この邦題はナニ？原題は？時代は？■□

本作の邦題は、「だからナニ？」とツッコミを入れたいくなるような、『午前4時にパリの夜は明ける』。他方、原題は『夜の乗客』だから、そのどちらを見ても、本作は何の映画かさっぱりわからない。しかし、「夜の乗客」が深夜ラジオの番組名だとわかると、さらに、午前4時がその番組の終了時間だとわかると、タイトルの意味が見えてくる。

私は1967年4月に大学に入学した後は、毎夜、当時大人気だった朝日放送の深夜ラジオ番組である「ABCヤングリクエスト」を聴いていたが、1981年から88年までの7年間にわたって描かれる当時のパリでは、ヴァンダ（エマニュエル・ベアール）がパーソナリティを務めるラジオ番組「夜の乗客」が大人気で、夫と別れたばかりのエリザベール

ト（シャルロット・ゲンズブール）はその愛聴者だったらしい。なるほど、なるほど。

しかして、本作冒頭は1981年5月10日のパリ。そこでは社会党のミッテランが大統領に当選したことに沸くパリの姿が描かれる。大阪府で黒田一革新府政が誕生した1971年には大阪が沸いたし、1993年8月の細川連立政権の誕生、2009年9月16日の自民党から民主党への政権交代では日本中が沸いた。しかし、1981年5月10日のミッテラン大統領の誕生は、その比ではなかったらしい。その日の深夜の「夜の乗客」では、ヴァンダの声で“「夜の乗客」の皆さん、5月11日になりました。今夜も朝4時までヴァンダがお供します。この特別な夜の話をお聞かせください”との声が続いていたが・・・。

## ■□■夫と離婚！2人の子供を抱え、今後の生活は？■□■

本作の主演エリザベートを演ずる女優は、『アンチクライスト』（09年）（『シネマ26』83頁）、『ニンフォマニアク』（13年）（『シネマ33』91頁）等で、あっと驚く“体当たり演技”を見せたシャルロット・ゲンズブール。14歳で初主演した『なまいきシャルロット』（85年）で彼女がセザール賞有望若手女優賞を史上最年少で受賞したことは有名だが、1971年生まれ彼女は、本作で、政治家志望の長女ジュディット（メーガン・ノータム）と、詩を愛する高校生の長男マチアス（キト・レイヨン＝リシュテル）を抱えながら、夫との離婚を目の前にして悲しみに暮れるヒロイン（？）を演じている。そんな彼女を慰めているのは父親のジャン（ディディエ・サンドル）だが、彼女は今「早く仕事を見つけなければ・・・」の思いで頭がいっぱいらしい。しかし、その数日後、「集会」から帰宅したジュディットが「初出勤はどうだった？」と尋ねると、「初日にして最終日、解雇されたわ。」と落ち込んでいたから、アレレ。

パリは多分、最も多く映画のタイトルにされている都市だが、エリザベート一家が住んでいるパリのアパートは、パリ郊外が見渡せる大きな窓が“売り”の高層の角部屋だ。エリザベートは父親に、「あの人、もうアパートを借りたみたい。女とサン＝ラザール駅の近くに」と説明していたから、このアパートは妻の取り分になっているようだが、慰謝料や養育費の支払いは一切ないらしい。離婚多発国のフランスでは、そんな甘い条件を妻は絶対に呑まないはずだが、本作はそんな法的論点を描くものではなく、チラシによれば、「孤独な少女との出会いが「家族」の絆を強くする——深夜ラジオがつかなく、愛おしく大切な7年間の物語。」らしい。なるほど、なるほど。

そんな目でスクリーンを見ていると、新たな仕事のためにラジオ・フランスを訪れたエリザベートは、「夜の乗客」のパーソナリティ、ヴァンダの面接をクリアし採用されたからめでたい。そして、ある日、番組のスタジオゲストとして収録した少女タルラ（ノエ・アピタ）が、行くところがなく、寒空の下一人で座り込んで煙草を吸っているところをアパートに連れ帰り、上の階の小部屋に泊まらせることに。しかし、夫と別れた後、それでなくとも経済的に苦しいエリザベートに、そんな余裕があるの？

## ■□■ 80年代のパリでのヒロインの奮闘は？家族は？ ■□■

1980年代の日本は、高度経済成長を遥かに超えたバブルの時代。不動産、株、ゴルフ会員権という三種の神器の価格がうなぎ登りに上昇し、人々は倍倍ゲームを楽しんだ。私もその中の1人で、1979年に独立して事務所を構えた後、80年代のバブル期はとにかく忙しく働き、忙しく遊んだ。日本のバブル時代はバブルがはじける1989～90年まで続いたが、1981年にミッテラン大統領が誕生する中、夫との離婚を余儀なくされたエリザベートが家族と共に生きた80年代のフランスは？エリザベートがラジオ・フランスに採用されたのは幸いだったが、家出少女タルラとの出会いと、彼女を寝泊まりさせたことによって、エリザベートの家族たちにはいかなる変化が？

私はてっきり、本作は女性監督の手によるものと思っていたが、本作の監督は『アマダと僕』（18年）で絶賛されたミカエル・アース。パンフレットにあるミカエル監督のインタビューによると、彼は自分の人格が形成された1980年代の子供時代に飛び込み、あらゆる光景や音を再現したいと思つたらしい。「決してドラマや葛藤を大げさにしないにもかかわらず、あなたの映画は静観するようなものではありませんね」との質問に対して、彼はそれを肯定した上で、「葛藤の不在にもかかわらず、映画を印象的に夢中になれるものにするために、音楽性、色調、抒情性を表現しようと挑戦しています。自分の人生観を反映した映画を作ろうと思っています。私は、人生において、余白だと思われるような部分を描いた映画を作りたいのです。私は主題に支配されていないような映画が好きです。人生が映画の主題であって、映画が主題の人質にはなつてはいけないと思うからです。」と答えている。なるほど、本作のエリザベートを見ていると、そんな監督の意図をハッキリ読み取ることができるので、それに注目！

## ■□■ フランスの中年の離婚女性の自由な生き方に感服！ ■□■

本作は脚本もミカエル監督が書いているが、ハッキリ言って、本作は徹頭徹尾エリザベート中心の映画。もちろん、そこに家出少女のタルラや、それぞれ個性を発揮する長女のジュディット、長男のマチアスとのエピソードが絡まるが、ストーリーの核はあくまでエリザベートだ。ミッテラン大統領誕生と離婚の試練がたまたま時期的に重なり合ったエリザベートが、以降7年の間にいかに家族の絆を強くしながら再生していくのかを、自由と変革の嵐が吹く80年代のパリを舞台に描いたものだ。

何かと保守的な日本では、夫から家だけはもらえたものの、慰謝料をもらえないまま子供の養育を押し付けられた40女は、もう生きていくだけで精一杯。仕事だつてろくなものは見当たらず、パート仕事を渡り歩くのが関の山だろうが、エリザベートは違う。当初は困惑していたものの、深夜ラジオの仕事はエリザベートにとってはまさに天職だ。そこで驚くべきは、仕事を始めた数日後に、あるへまでヴァンダを怒らせてしまったエリザベートが、優しく彼女を慰めてくれた同僚のマニユエル・アゴスティニ（ロラン・ポワトルノー）とすぐに“いい仲”になってしまうこと。アレレ、アレレ、しかし、これがフラン

ス流？さらに驚くべきは、ラジオ局の仕事と合わせて、図書館の仕事も始めたエリザベートが、どうやら彼女に一目惚れしたらしい男ユーゴ（ティボー・ヴァンソン）との恋仲を急発展させること。ついには、家族と暮らした、あのパリの街が見渡せるアパートを売り払って、ユーゴの元に行く決心をしたからすごい。フランスでは40おばさんにしてこの発展ぶりだから、突然やってきたタルラとの間でいろいろあったマチアスもタルラとすぐに“いい仲”になったようだし、政治家志望でしっかり者のジュディットは既に家を出てルームメイトと共に暮らしていたから、エリザベートがアパートを売り払いユーゴと一緒に暮らすことになっても大丈夫。どんな状況下でも自由に生きていくことができる、こんな1980年代のフランスの姿にあらためて拍手！

2023（令和5）年5月2日記